Japanese Association of Russian Scholars

國本哲男先生への弔辞

藤　本　和貴夫

國本哲男先生は1996年３月10日急性心不全のため逝去された。享年70歳。

先生は大阪大学を定年で退職されるころから，週に数回の腎臓の透析を受けるという闘病生活を強いられておられたが，愛された詩人プーシキンの故地サンクト＝ペテルブルクに最後まで心を馳せられていた。

先生は1925年（大正14年）に神戸で生まれられた。先生のロシア語とのつきあいは広島の陸軍幼年学校に始まる。当時のロシア語のテキストと辞書を見せていただいた記憶がある。敗戦後，大阪外事専門学校ロシア科に入学し，1949年（昭和24年）に卒業，引き続き53年（昭和28年）に京都大学文学部史学科を卒業された後，同大学院経済学研究科に進まれている。

戦後の関西で，ロシア・ソビエトの研究を専門的に行うことのできる学部はほとんどなく，唯一人々が集まっていたのがソビエト経済の研究である。ロシアの歴史を専攻しながら，経済学研究科に進まれたのもそのような場を求めてのことであったように思われるが，これはその後の先生のロシア・ソビエトに関する幅広い関心の基盤になっているようである。

中学の先生から大阪外国語大学の教官になられたのは1960年で，61年，私が２年の時に始めて受けた授業はロシア語のシンタックスであった。専門のデカブリストに関する講義は，非常勤講師を勤められていた京都の立命館大学でのみ聴くことができるという，今からみれば少々奇妙なカリキュラムであったが，講義は厳密で，研究は妥協を許されなかった。しかし学生にとってはこわい反面，徹底的に面倒を見るという面もあり，多くの後進を育てられた。

研究者としての転機は，1966―67年に文部省の在外研究員としてレニングラード大学に留学され，レニングラードの研究者たちの「自由と批判精神」に接触されたことではなかったかと思う。大阪大学に移ってから完成された主著『ロシア国家の起源』（ミネルヴァ書房，1974年）は，ロシアの諸「年代記」における建国伝説の比較検討から，言語学，考古学，古銭学，文献学など広範な関連諸科学の研究の蓄積に基づくもので，これまで論争になってきたルーシの「ノルマン説」・「非ノルマン説」に対して，新たにルーシ第１陣をバル

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

ト・スラブ人，第2陣をヴァリャーグ（ノルマン）人とする仮説を提起され，わが国におけるロシア国家起源論と古代ロシア研究の基礎を築かれた。

先生は生涯プーシキンを愛し，「青銅の騎士」などプーシキンの作品に現れた啓蒙君主としてのピョートル大帝像の検討を通してその歴史観を明らかにし，さらに歴史家カラムジーンの「ロシア国家」とプーシキンの「ボリース・ゴドゥノーフ」における皇帝ゴドゥノーフ像の比較検討によって，歴史研究と文学研究の総合を図ろうとされた。

1976年から1981年まで日本ロシア文学会副会長。また，後年プーシキンとペテルブルクをテーマとした市民講座などを通じて多くの「國本ファン」を生み出した。

NII-Electronic Library Service